



特定非営利活動法人

そだちの樹

ニュースレター

Number 4

Published on Nov. 25, 2013

特定非営利活動法人そだちの樹

〒810-0041

福岡市中央区赤坂1丁目16番13号
上ノ橋ビル7階

TEL : 092-791-1673

FAX : 092-791-1674

URL : <http://sodachinoki.org/>



「ここ」で過ごした時間 - 入居者から -



約2カ月間、あっというまだったけど「ここ」で生活できてほんとうに良かったです。

「おはよう」「おやすみ」「いってきます」「いってらっしゃい」ってあいさつができること、スタッフさんや一緒に「ここ」にいる子とみんなでごはんを食べれること、どこかに出かけても「ここ」という家で待っててくれるひとがいること、帰ってきたいと思える場所があること……。もしかしたらフツーのことかもしれないけれど、そんな生活がとても嬉しかったです。

自分の苦しいときとか不安なときとかもあったけど、スタッフさんやコタンの弁護士さんたちが話をきいたり、一緒に考えたりしてくれたからのりこえていけたと思います。

「大丈夫だよ。」って言ってくれたり、いろんなことを教えてくれたり、一緒に料理をつくったり、楽しいことがいっぱいありました。今までの生活だったらそれどころじゃなくてなにもできなかったけど「ここ」で生活できてたくさんのひとが支えてくれたからハローワークに言ったり面接に行ったりすることも頑張れたと思います。

9月から働くことになりました。ひとりぐらしや初めての職場に不安なことはたくさんありますが、ひとりでもちゃんとごはん食べて（笑）頑張って生活していきたいと思いません。

ありがとうございました。

（元「ここ」入居者）

初めての支援スタッフ養成講座

1 はじめに

2013年9月1日（日）と21日（土）の2日間にわたり、そだちの樹初の支援スタッフ（ボランティア）養成講座を実施しました。9月1日は福岡市人権啓発センター、21日は福岡市中央市民センターで行いました（両日とも午前10時30分から午後4時30分まで）。

2 緊張の開講！

9月1日。ただでさえ緊張しているのに、台風直撃であわや中止か、というハラハラドキドキのおまけ付きでした。しかし、幸い、台風の影響はなく、開催の運びとなりました。しかも、悪天候が予想される中、約30名もの方にご参加いただきました。

第1講では、そだちの樹理事長の橋山吉統（弁護士）より、「子どもの権利」という観点から、子どもシェルターの存在意義について、具体例を交えながら説き起こし、「ここ」の概要や「ここ」を退居した後の子どもの支援について話をしました。

第2講では、そだちの樹副理事長の松崎佳子（九州大学教授）より、思春期に関する基礎知識から、虐待や非行のメカニズム等に至るまで、心理学等の理論や珍しい街頭アンケート調査結果等を示しながら、話をしました。

第3講では、「ここ」の常勤スタッフより、支援にあたっての指標を示した上で、ボランティアスタッフにご協力いただく仕事の具体的な内容や配慮点について話をしました。

第4講では、福岡市こども総合相談センター子ども支援課長の瀬里徳子氏より、社会的養護の基礎知識や現状、その中で大きな役割を担っている児童相談所の活動と今後の展望等について、様々なデータを交えながら、ご講義いただきました。

3 引き続き、第2回開催！

第2回は、3連休の初日であったにもかかわらず、約20名の方にご参加いただきました。

第1講と第3講は第1回と同じ内容で、第2講と第4講は、子ども支援の現場で活動されているゲストをお呼びして、お話しいただきました。

第2講では、子どもへの暴力防止（Child Assault Prevention）プログラムを実施しているNPO法人にじいるCAPの代表理事、重永侑紀氏より、ロールプレイを交えながら、暴力を受けてきた子どもが示す症状、それを踏まえての支援者としての心得、虐待は連鎖しないこと等をご講義いただきました。

第4講では、社会的養護の先輩である自立援助ホーム「かんらん舎」のスタッフ大谷幸代氏より、かんらん舎に入居している子どもの現状や就労支援の実際について、貴重なご経験談を織り交ぜてご講義いただきました。



4 おかげさまで好評でした

受講したほとんどの方が、4コマ全てを受講してくださいました。中には、2日間とも受講した方もおられました。どちらの回についても、「分かりやすかった」「もっと聞きたかった」等のお声を多数いただきました。

5 皆様の熱い思いに感謝・・・

悪天候や連休初日にも関わらず、多くのご参加者に足を運んでいただきました。長時間にわたって受講していただきました。アンケートにも、丁寧に回答くださいました。講師の方々には、短い時間の中で、社会的養護にまつわるエッセンスを詰め込んだ、密度の濃いお話をしていただきました。皆様の熱い思いに感謝の一言です。

ボランティアの応募も、複数頂戴いたしました。

今後は、より参加しやすい会場やタイムスケジュールをご用意する等の工夫をし、一層充実した研修を行っていきたいと思います。

（運営委員 三浦徳子）

退居後支援事業はじめました。

退居後支援事業では、社会への一步を踏み出した、人たちの巣立ちをサポートする事業です。社会へ出て、自分の足で歩いていくということは、自由を手に入れることでもあり、責任を担うことでもあります。そして、その道のりは時に楽しく、時に困難です。「ここ」を退居した人の中には、この社会への一步を、少し早目に踏み出さなければならない人もいます。そんな時、社会への一步を踏み出したばかりの子どもたちを温かくサポートする、それが「退居後支援事業」です。時に困難な道のりを、うまく歩くことができるように、私たちは一緒に歩きます。そして、一人でしっかり歩ける日を応援しています。退居後支援事業では現在、この主旨に賛同した大人たちが集まって、あれやこれやと智恵を出し合う「(仮)検討委員会」を月2回の頻度で開催しています。かつて、小さな子どもだった大人たちは、時に、「自分だったらどう感じるだろうか。」と遠い(近い)記憶を引っ張り出して、専門知識と併せながら解決策を検討しています。

その人の気持ちはその人にしか分かりません、その人の幸せも、その人にしか分かりません。けれど、私たちは目の前の子どもの気持ちを分かりたい、そして、どんなふうにしたら最善の利益を選択できるのだろうか？ 私たちはそのために、何ができるのだろうか？ 毎月2回のアフターファイブに頭を突き合わせて考えています。そして、(仮)検討委員会で出し合った策を手には、ここを退所した子どもとの定期的な面会や就労(継続のための)支援、生活の困りごとへの対応などを行っています。

さて、ここで退居後支援のメンバーをご紹介します。弁護士、臨床心理士、社会福祉士、精神保健福祉士等とそれを目指す学生、漢字で表すと、とても固く見えますが、メンバーはみんな、人当たりも思考も柔らかい人ばかりです。年齢は、さまざまです。

[メンバーの声]

・この事業は、これまでコタンとして活動してきた私にとっては、乏しい知識と経験に頼った自己流の支援に専門的なバックアップが得られるという点で、大きな安心材料となってきています。支援に当たる私たちのこの安心感は、かわりに余裕を生み、子どもたちの生活と心の安定を確実に下支えしています。「ここ」からの退居は、子どもたちにとってはスタートラインにすぎません。その先の道のりを支える力強い取組みとして、この事業を発展させていければと思っています。(安孫子健輔/コタン)

・春過ぎから、この事業に参加させていただいている、年だけはとっている新米メンバーです。退居して、社会に出、いろいろな困難にたちむかおうとする、若者達の、少しでも力になれば、そして、思い悩みを一緒に考えられる私になればと思っています。(相正和/社会福祉士)



子どもも、おとなも、年齢、職業に関わらず、この事業を通して出会った私たちです。この出会いを通じて、皆でひとつのことに、共に悩んだり、喜んだり、一喜一憂しています。そうして、退居後支援を経た子どもたちは、更に、次の出会いを切り開いていくことでしょう。その時、退居後支援は一旦終結することになるのかもしれませんが、しかし、その先も、つまづいて支えが必要な時には何度でも頼れる、この事業が、そんなふうになっていければと、願わずにはいません。

(退居後支援検討委員会委員長 山崎千香子)

山崎千香子
こ、こたん



ボランティアスタッフの業務日誌

私は「ここ」のボランティアスタッフとして、夜「ここ」を訪れてから、次の日の朝ごはんまでを子ども達と過ごしています。寝る前の1日を振り返る時間、そして起きてからの1日を始める時間を、安心した気持ちで過ごしてもらえれば、との思いで子ども達と関わっています。

先日、児童養護施設で暮らす子ども達を描いた『世界地図の下書き』*という本の中に、「たまに、自分たちが生きていくためには、自分の力ではどうしようもないところからの支えが必要なのだと実感するときがある」という一文を見つけました。「ここ」では、日々の生活の中でコタンの先生方やスタッフさん方が“どうしようもないところからの支え”となって子ども達の自立を支えているように感じます。

その一文の後には、「そしてそれは、家で家族と暮らしているクラスメイトも感じていることなのかどうか、よく分からなくなる」と続きます。「ここ」で出会う子ども達も、こういう気持ちで自分の置かれた状況と向き合っているのだな、と実感を伴って考えさせられました。“家で家族と暮らすクラスメイト”だった私ですが、いつか“どうしようもないところからの支え”になれるよう、今は「ここ」で出会う子ども達の気持ちに想像を働かせながら、関わっていきたいと考えています。

* 浅井リョウ著『世界地図の下書き』（集英社、2013）

（HM）

全国ネットワーク会議 in 福岡

2013年9月14日、15日の2日間、全国の子どもシェルター関係者が一同に会して議論を交わす「子どもシェルター全国ネットワーク会議」が福岡で開催されました。

既に子どもシェルターを開設している7つの法人をはじめ、開設間際の札幌と和歌山、開設準備を進めている埼玉、千葉、新潟、高知、北九州から計15団体、支援をいただ



ている麒麟福祉財団の担当者を含めて総勢73名が参加し、子どもシェルターの課題と今後のあり方を共有しました。

来年度は札幌で開催することが決まりました。レラピリカでは、子どもシェルター開設のため建物を新築中とのことで、見学できるのが楽しみです。

（運営委員 安孫子健輔）

ご支援のお願い

そだちの樹では、子どもたちの支援を充実させるため、また年間1500万円を超える「ここ」の運営費をまかなうため、随時、ボランティアのお申出や会員登録、寄付などのご支援をお願いしています。

ご支援をいただいたみなさまには、ニュースレターなどを通じて、活動報告やご参加いただけるイベントの情報等をお知らせしています。

ご支援のお申出、お問合せの方法は、そだちの樹のウェブサイト（<http://sodachinoki.org/>）やパンフレットにてご確認ください。

そだちの樹ウェブサイト ▶



編集後記

一過酷な人生を生き抜いてきた子どもたちに、「ここ」で羽休めをしてもらおう。次の一步を踏み出す力を蓄えてもらうために。一

「ここ」を開設した時に掲げたこのスローガンは、実はまだ前半分しか実現していません。「羽休めの場所を用意できれば、きっと子どもたちは前に進んでいくだろう。」開設当初に描いた青写真は、今では「子どもたちの前には行く手を阻む壁が絶望的な高さでそびえ立っている。」という厳しい認識に変わりつつあります。

新しく始まった退居後支援事業は、この壁を子どもたちと一緒に乗り越えようという野心的なプロジェクトです。素晴らしい仲間を得て、いま、一つ一つ足場を組み上げています。「ここ」と同様、温かいご支援をいただければと思います。

（編集委員 あびこ）